



# 川東小だより

第3号

平成30年6月15日

新発田市立

川東小学校

☆☆合い言葉は、「夢や目標」に向かってチャンス・チャレンジ・チェンジ です。☆☆

## 「あなたは真っ直ぐでよい御気性だ。」

教頭 富田 一志

夏目漱石の初期の作品に、「坊ちゃん」があります。お読みになられた方も大勢いらっしゃると思います。私に文学論として「坊ちゃん」を語ることはできませんが、久しぶりに読み返し、自分なりに考えたことがあります。今回はそのお話をします。

さて、坊ちゃんは、とにかく「無鉄砲で直情的な江戸っ子」です。小さいころから腕白（わんぱく）で、いたずらやら喧嘩やら、そのエピソードには事を欠きません。

同級生に「弱虫やーい」と囃（はや）したてられれば、小学校の二階から飛び降りて1週間ほど腰を抜かしたり、菜園の栗泥棒に来る隣家の倅（せがれ）と大格闘をしたり、よそ様の人参畑で相撲を取り、人参をダメにしたり…。当然、父や母は怒ったり呆れたり、謝罪したりするわけです。坊ちゃんは言います。「おやじはちっともおれを可愛がってくれなかった。母は兄ばかり鼻負（ひいき）にしていた。」

「おれを見る度にこいつはどうせ碌（ろく）なものにならないと、親父は云った。乱暴で乱暴で行く先が案じられると母が云った。」

坊ちゃんの母が亡くなり、父兄との3人暮らしが始まった後、坊ちゃんは、父曰く「勘当する」と言い出すような事件を起こします。この時、すっかり勘当される気でいた坊ちゃんを助ける唯一人の人物がいます。十年来召し使っている「清」というお婆さんです。

坊ちゃんの「清」に対する印象はこうです。

「(略) この婆さんがどう云う因縁か、おれを非常に可愛がってくれた。不思議なものである。母も死ぬ三日前に愛想をつかした——親父も年中持て余している——町内では乱暴者の悪太郎と爪弾きする——このおれを無暗に珍重してくれた。」つまり、坊ちゃんは「清」がどうしてこうも自分を大事にするのか不審がるわけです。何事かにつけ、「あなたは真っ直ぐでよい御気性だ。」と云って、「清」は坊ちゃんを誉めます。「お世辞は嫌いだ。」と坊ちゃんが言えば、「それだから好い御気性です。」と云っては、嬉しそうに坊ちゃんの顔を眺めるのです。

父の死後、坊ちゃんは600円の金を渡され兄と別れ、学問し、四国の数学教師として東京を離れます。赴任した中学でもトラブルの連続です。手の焼ける生徒たちとのいざこざ、同僚たちとの葛藤。坊ちゃんは、持ち前の無鉄砲さからくる「正義感」で反発します。

そんな中で、坊ちゃんは、度々「清」の事を思い返します。「清はおれの事を欲がなくて、真直な気性だと云って、ほめるが、ほめられるおれよりも、ほめる本人の方が立派な人間だ。何だか清に逢いたくなくなった。」「単純や真率が笑われる世の中じゃ仕様がな。清はこんな時に決して笑った事はない。大いに感心して聞いたもんだ。」

物語のクライマックス、同僚の「山嵐」と一緒に、卑怯者たちを思う存分成敗した後、坊ちゃんは東京に戻ります。以下、物語ラスト1ページにこうあります。「清の事を話すのを忘れていた。—おれが東京に着いて下宿にも行かず、鞆を提げたまま、清や帰ったよと飛び込んだら、あら坊ちゃん、よくまあ、早く帰って来て下さったと涙をぼたぼたと落とした。おれも余り嬉しかったから、もう田舎へは行かない、東京で清と家を持つんだと言った。」

その後ある人の周旋で街鉄の技師になった。清は（中略）肺炎に罹って死んでしまった。死ぬ前日におれを呼んで坊ちゃん後生だから清が死んだら、坊ちゃんの御寺へ埋めて下さい。お墓の中で坊ちゃんの来るのを楽しみにして待っておりますと云った。だから清の墓は小日向の養源寺にある。」

**坊ちゃんの人生を支えたのは、清の「見返りを求めない愛」**だったのではないのでしょうか。どんな時も「あなたは真っ直ぐでよい御気性だ。」と言い続けた清。坊ちゃんを信じ励まし続けた清。そこには、「坊ちゃんを戒め改心させる」という欲はありません。見返りを求めない「こころ」があるだけです。

漱石が描いた「清」には、「人育て」という教育の本質をみる気がしてなりません。人を支え励ますことは、本当に尊い行いだと思います。